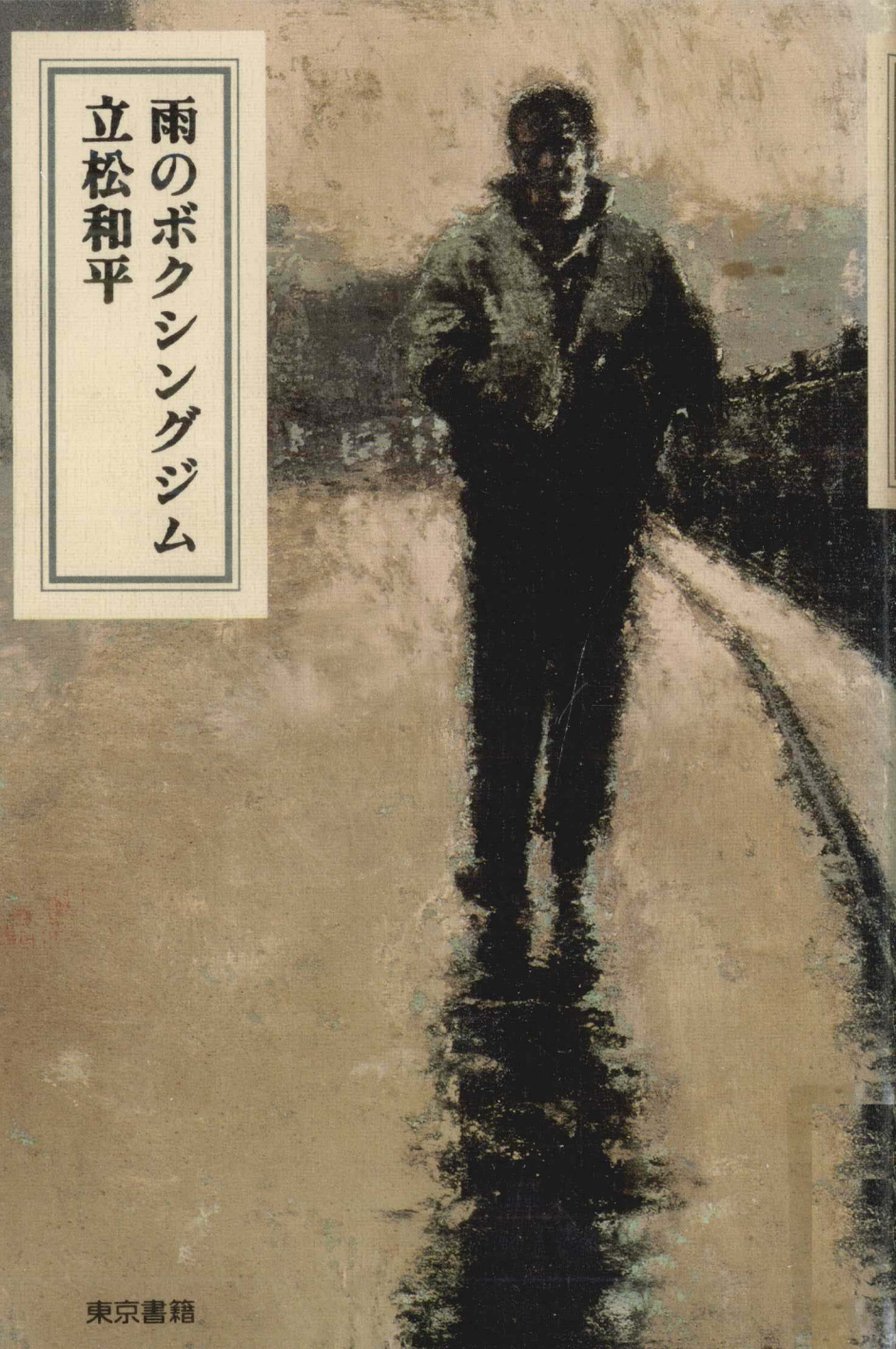
# 雨のボクシングジム

立松和平



東京書籍

# 雨のボクシングジム

立松和平

東京書籍

立松和平（たてまつ・わへい）
1978年第1回早稲田文学新人賞，1980年第2回野間文芸新人賞，
1985年若い作家のためのロータス賞（A・A作家会議）以上受賞。
小説『春雷』『遠雷』（以上河出書房）『歓喜の市』『天地の夢』（以上集英社）
『砂の戦記』（新潮社）エッセイ『アジア混沌紀行』（筑摩書房）『楽しい
貧乏』（六興出版）写真集『釧路湿原』（グラフィック社）他

雨のボクシングジム
1989年6月1日第一刷発行
著者 立松和平
発行所 東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18
942-4111（営業）942-4173（編集）
印刷製本 図書印刷株式会社
©Wahei Tatematsu 1989, Printed in Japan
ISBN4-487-75230-2

TOKYO SHOSEKI PRESENTS.

# 雨のボクシングジム　目次

## 雨のボクシングジム

あらたなる伝説のために——帝拳ジムと大場政夫　9
江戸っ子ボクシング六十年——日東ジム　27
世界チャンプへの果て遠き夢——国際ジム　45
シュガー・レイ・レナードとアメリカの夢　63
マイク・タイソンという物語　80
誰も知らなかった世界チャンピオン　108
ペンとサンドバッグの日々　125
雨のボクシングジム　138

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

## 遠い橋を渡ってきた男

遠い橋を渡ってきた男――新浦壽夫　147
天才少年投手、江川卓　154
プロ野球キャンプめぐり日記　157
僕の好きな選手たちと話した　176

## 灼熱の夢・ラリー

ラリーの持つ魔性　207

熱砂無情――パリーダカール・ラリー　211
志賀高原ラリーを走ってきた　218
香港から北京へ七〇〇〇キロを走った！　221

## 片隅のオリンピック

片隅のオリンピック　245

胸を打つ〈走る哲学者〉たち　259
クレー射撃奮戦記　260
風土のなかの力士　275
氷と風の小宇宙・スケート　279

後記　282

装画　横山明
装丁　スタジオ・ギヴ

# 雨のボクシングジム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

## あらたなる伝説のために——帝拳ジムと大場政夫

練習風景がまる見えの事務所の壁に、一枚の額がある。長野ハルはその額をまぶしそうに見ていう。

「いかにも子供らしいでしょう」

中学校を卒業したばかりの大場政夫が帝拳ジムに最初の痕跡を残した入会申込書である。たしかに子供らしい不安定な文字は、不世出の天才ボクサーの書き残したものだと思えば、不思議なういういしさが感じられる。

日付は昭和四十年六月一日。大場政夫。生年月日、昭和二十四年十月二十一日。住所、東京都板橋区清水六六（二木方）。勤務先、東京都台東区上野町六の四の六、ＫＫ二木。体重四八キロ、身長一六〇センチ。選手希望。

頼りない字体で書かれた「選手希望」という言葉が、いかにも若い気負いに充ちている。東京都足立区で生まれた大場は上野アメ横の菓子問屋に住み込みの店員として就職した。東京都で生まれながら近くの区で住み込み店員になったことでも、大場少年の家の事情が知れる。中学を卒業した三月三十一日から、帝拳ジムに入門した六月一日までのおよそ二カ月間、時代が大場少年

の眼にはどのように映っていたのだろうか。
勤務先の上野から寮のある板橋への途中、ほんのすこしまわり道をすればよい王子に、当時の帝拳ジムがあった。このほんのすこしのまわり道が、大場少年の運命を大きく変えることになる。
帝拳名物の女性マネージャー、長野ハルは、大場の話をすると、懐かしくてたまらないのだという表情をつくる。それは母親の慈しみの顔だ。
長野「入門したのが昭和四十年六月一日、先代の会長（本田明）がなくなったのが四十年の七月三日です。ちょうど一カ月前ですから、入会した時は印象によく残ってないんですよ。中学を卒業してから、集団就職というか、学校の推薦で二木の菓子に入りました。とにかく自分の家が貧しくて、住み込みで働くという条件で就職したみたいですね。仕事に慣れてから入会したんじゃないですか。入った時ね、会長の病気がいちばんひどい時ですから。会長がなくなって落ち着いてから、入会したのを知ったんです。先代の会長は合宿所に選手をたくさんいれるのが好きだったんですよ。広かったですからねえ。誰か一人置かないと私も一人で心細いし。桑田トレーナーに、ジムの掃除もしなくちゃいけないし誰かいい子がいたら若いの一人置いてよっていったら、あれがいいって。なんだか青白い顔をしているので、掃除でもさせとけばいいやってことだったんですよ。でも、トレーナーの感触では、気が強いってことがあったんでしょうねえ、センスがよくてしっかりしてるって。デビュー戦の時にはフライに足りなかったですからねえ。今ならジュニア・フライでデビューしたんでしょうけど、あの頃はありませんしねえ。昔は世界チャンピオン、強かったですもん。小坂や高山がぶつかったチャンピオン、強かったですもんねえ。うちの選手じゃなくても、関光徳さん、今だったらなったでしょうねえ。今日ちょうど高山さんが見えて、

親父さんの墓参りさせてもらって帰りますって」

高山一夫は帝拳の黄金時代を築いた中量級のエースだった。昭和三十年代、帝拳は東洋と日本のチャンピオンを輩出している。列挙してみよう。

福地健治　昭三十一　東洋／日本ウェルター級
小林久雄　昭三十三　東洋フェザー級
高山一夫　昭三十三　日本フェザー級
品田　博　昭三十四　日本ウェルター級
小坂照男　昭三十五　東洋／日本ライト級
渡辺　亮　昭三十六　東洋ジュニア・ウェルター級／日本ウェルター級
金田森男　昭三十八　日本ミドル級
滑川明石　昭三十九　日本フライ級

錚々たるメンバーである。このなかで今でも人に語り継がれている物語を持っているのは、高山一夫と小坂照男が双璧だろう。

高山は昭和十一年十一月十一日神戸に生まれた。母を三歳の時に失い、船員の父は家にいないことが多い。兄三人、姉一人の末っ子で、小さい時から向うっ気が強い。中学二年生の時、高山は秋祭りにヤクザを相手に大喧嘩をしたという。相手はドスを持っていたが、高山は棒杭一本で相手の頭をたたき割った。要するに手のつけられない突っ張りで、少年鑑別所に入った時、次兄にボクシングをすすめられた。家出同然にして上京し、いきあたりばったりに北区王子の帝拳ジムの門をたたいたのであった。

リングでも喧嘩ファイトだった。無器用だがパンチ力は群を抜いていた。デビュー後四年四カ月で日本フェザー級のタイトルをとり、五度防衛した後、世界タイトルに挑戦。これが伝説的な好ファイトとなったのである。

昭和三十五年八月二十九日、後楽園特設リングだ。〝ダンプにぶつかるルノー〟とさえ評され、日本人にとってもっとも重いクラスへの挑戦だったのである。アメリカ人黒人選手デビー・ムーアはバネの固まりだった。初回、高山はムーアの右フックをくってロープにとばされた。はね返りさま、今度は高山が右フックのカウンターを放ち、ムーアが反対側のロープにふっとんだ。勢いあまってムーアは転落しそうになり、あわやレフリーに抱きとめられた。この後は打ちあいが続き、結局一五ラウンドまでいって、判定負けを喫した。高山の驚異的なタフネスぶりが印象づけられた。

それから高山は九戦全勝（七ＫＯ）、ムーアも十戦全勝（五ＫＯ）し、二人の夢の再戦は昭和三十六年十一月十三日国技館と決定した。だがさすがにチャンピオンである。高山の強打を骨の髄まで知っているので、今度は接近戦での打ちあいを避け、ストレート主体のアウト・ボクシングに徹した。強打が空転した高山は、一三ラウンドで左アッパーによりダウンを奪われるが、一五ラウンド判定で敗れたのであった。

伝説のサウスポー小坂照男も、高山とムーアと同じように、宿敵を持っていた。フィリピンの英雄フラッシュ・エロルデである。この二人の精魂込めた研鑽は、日本とフィリピンで五度もくりかえされた。

小坂照男は昭和十五年十一月十八日千葉県富津町生まれ。中学卒業後神奈川県葉山町でクリー

ニング屋に勤めている時、帝拳創立者荻野貞行に見いだされて入門。十六歳であった。昭和三十三年九月二日から二十七連勝し、マニラで東洋ライト級タイトルに挑戦しフラッシュ・エロルデに退けられた。昭和三十六年九月二日のことである。再戦は昭和三十七年四月三十日、今度はエロルデが日本に来たのである。初回から白熱した打ちあいになった。技巧のエロルデと馬力の小坂で、好対照のタイプだから余計おもしろい。エロルデがやや優勢のまま一一ラウンドをむかえ、小坂は猛然とラッシュをした。そして、大接戦の判定の末、小坂が東洋ライト級タイトルを獲得したのだった。だが同年、八月四日、小坂はエロルデと再び闘い、タイトルを奪われてしまう。小坂はわざわざフィリピンまでいってタイトルを返してきたのである。

小坂に世界タイトル挑戦のチャンスがめぐってきたのは、その年の十二月六日だった。時の世界ライト級チャンピオンは、プエルトリコのカルロス・オルチスだった。しかし、日本のファンは世界のレベルの桁違いの強さを見せられることになる。五ラウンド二分三十二秒、右アッパーによって小坂はカンバスに沈んだ。強烈なノックアウト劇に、世界タイトルの遠さをまざまざと知るところとなった。

しかし、それから小坂は白星を十三個（七KO）連ね、生涯の好敵手エロルデに挑戦する。この時エロルデは世界チャンピオンだった。小坂には二度目の世界タイトルマッチである。小坂は好調だったが、エロルデのカウンターはそれを上まわっていた。一二ラウンド、ダウンした小坂になおエロルデが攻撃の手を休めずにいると、レフリーが一分四十五秒に試合をとめ、TKOを宣した。早すぎる裁定に会場は一触即発の険悪な雰囲気になった。

エロルデとの最終戦は昭和四十年六月五日である。勇んで敵地に乗りこんだ小坂ではあったが、

前半からダウンを奪われた。五回目の闘いはこれまでの緊迫した雰囲気とは違っていた。一五ラウンド二分十四秒、小坂は精根尽き果ててカンバスに横たわった。ボクサー小坂照男は走りつづけて最後の場面にきてしまったのだ。史上でも希な好敵手同士の死闘は、小坂の一勝四敗に終った。五年間にわたる死闘は長く人の心のなかで生きつづけるだろう。

名門帝拳にして、世界タイトルに五度挑戦し、ことごとく敗れ去っている。世界チャンピオンを生むのは、その後五年半、大場政夫の登場まで待たねばならない。

帝拳は日本でもっとも古いプロボクサーのジムである。大正十五年七月、新橋駅近くの土橋のガード下に、帝国拳闘協会拳道社として生まれた。創立者は荻野貞行と田辺宗英、やがてマネージャーとして本田明が入ってきた。世間ではボクシングとは何かもわからない草創期、読売講堂や日比谷音楽堂で興行試合をし成功しているものの、どれだけ難儀をしたものか今となってはわからない。「浪花節の切符なら買ってもよいが、拳闘の切符はタダでもいらない」とさえいわれたのである。

昭和二十三年、本田明が帝拳株式会社を興して帝拳ジムの戦後がスタートする。ジムは三田の慶応大学の前にあったが、昭和二十七年に北区王子に移り、その後昭和五十八年に現在の早稲田に移ってきた。

本田明にはいろんなエピソードが残っている。品のよい初老の紳士の風貌なのだが、めっぽう向うっ気が強い。乗った車がバックしただけで機嫌が悪くなるという徹底ぶりだ。ジムの選手が前にでていさえすれば、たとえ負けてもよくやったと会長はほめる。しかし、後退ばかりして引



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com